

## 聖書の集い（第6回）

2014年11月5日

古本 靖久

- 1、聖歌 462番 「飼い主わが主よ」
- 2、お祈り
- 3、聖書 「ガラテヤの信徒への手紙 3章21節～25節」  
(新約聖書 346 ページ)
- 4、今日の内容

### 「ママがそう言ったから」を卒業する —動機の法則—

早いもので、11月になりました。今年もあと2か月、そして年長さんにとっては、幼稚園での生活もあと5ヶ月です。わたしの息子が行く予定の小学校でも入学届を出す時期になっておりますし、これから身体測定や学習用具の購入など、いよいよ小学生になる準備がはじまっていきます。

わたしの子どもたちは年子で、姉は今、小学校一年生です。さて、その姉ですが、小学校に入る前と入った後で、大きく違ったことがあります。それは何かと言いますと、「子どもが何をしているのかわからない時間が多い」ということです。

幼稚園や保育園に子どもを通わせている時には、送り迎えをして、先生とも日常的に顔をあわせますから、何かあればすぐに知らせてくれる。良いことも、時には聞きたくないことだって、耳に入れてくれるのです。ところが小学校の場合はそうはいきません。参観日や懇談会、家庭訪問など、わたしが子どもの時に比べると多いようには思いますが、先生の顔を見る機会はずいぶん減ります。その時に、子どものことがとても心配になるのです。

しかし子どもたちは成長していきます。わたしたちは、いつも彼らのそばにいられるわけではないのです。つきっきりで見守るわけにはいかないのが現実です。例えば部屋の片づけを子どもにさせる時に、「なぜ片付けるのか」が正しく伝わっていなかったらどうでしょう。おもちゃを捨てられるから、親が怒るから、ご飯の時にしゃべってくれなくなるから、そのような理由で子どもが部屋の掃除をするならば、自分の部屋を持った時に、一人暮らしをした時に、子どもは同じように部屋を片付けるのでしょうか。その行為の裏には、正しい「動機」が必要なのです。

話は変わりますが、みなさんはキリスト教を含む「宗教」というものに、どのようなイメージをお持ちでしょうか。わたしは中学生の時に初めて教会に行ったのですが、きっとそこに通う人たちはみんな、とても素晴らしい人だろうと思っていました。厳しい決まりを全部守り、悪いことなど全くしない。でも現実はそのようではなかったのです。別に悪人揃いというわけではありませんが、みんながみんな、聖人君子のような人ではない。

でも、教会に通う人たちと話をしていく中で、気付かされたんですね。その人たちは神さまの顔をうかがい、ビクビクしながら生きてはいないことに。それどころか神さまからの愛を一身に受け、喜びをもって毎日の生活を送っておられるのです。わたしは正直思っていました。これをしてはいけない、あれも駄目だということをみんな必死に守っているのだと。でも、そうではないことに気づき、わたしも神さまに感謝をしながら生きていきたいと思ったのです。

このクリスチャンと神さまとの関係は、子どもと親の関係と通じるようなように思えます。子どもが親の顔色ばかりを気にして、親に叱られないように毎日を過ごす。親から見たら聞き分けの良い子どもに見えるでしょうが、本当に子どもの将来のことを考えると、どうなのでしょう。そうではなく、子どもたちが自ら考えて行動する。どうすることが自分にとって、そして周りの人たちにとって心地よいことかをいつも思う。そのような子どもに育てて欲しいのです。

子どもたちが「ママから」そう言われたから行動するのではなく、自分で考え行動する。そのためには「動機」が必要です。聖書はすべての行動の動機を「愛」に根差すようにと教えます。

わたしたちが子どもたちに対してできること。それは精一杯の愛をたっぷりと子どもたちに注いであげることです。子どもの心に寄り添い、どれだけあなたが子どものことを大切に思い、愛しているのかを絶えず伝えてあげることです。子どもが悲しんでいる時も、喜んでいられる時も、失望している時も、怒っている時も、寄り添い続ける。それが親が子どもたちに対してできる最高のことです。

自分が愛されることで、子どもたちは、すべての基本は愛にあることを学びます。隣の人を大切にし、知らない誰かのことを気に掛ける。その思いからなされる行動はもう、「誰かがそう言ったから」行うことではなくなっているでしょう。

※ 11月23日(日)11時から「子ども祝福式」をおこないます。  
お子さんの成長を神さまに感謝し、一緒に祈ります。  
また昼食はカレーライスを作ります。どうぞお気軽にお越しください。

